

天白祠と甲州依田家

藤村潤一郎

甲斐国山梨郡下井尻村（現山梨市下井尻）の依田家について研究していると、文書の他にも史料があることに気付いてきた。

依田家と下井尻村周辺の地形、家屋、墓所、社寺、石遺物、聞取りなどである。

依田家文書⁽¹⁾をみると家屋の建築、所持地の字名、寄進物の所在などが記るされており、これらの関係物が存在していることに気付きながら、確認していない物が多い。同村の井尻家文書⁽²⁾についても事情は変らない。

つぎに下井尻地区は次第に市街地化しているが、天白祠など依田家の遺物の外に、各種の遺物が残っている。元禄・正徳期の青面金剛の庚申塔、嘉永期の道祖神などがそれである。庚申塔は素人なので不安は残るが、この時期の庚申信仰関係の文書はまだみていないので、遺物で文書の欠を補うことができる。天白祠は逆に、文書で気付いて遺物を確認した。

文書と遺物を一体化して近世の依田家と下井尻村の生活を再現できればよいが、実際には文書から出てくる問題だ

けでも処理しきれない。

ここでは下井尻村の天白祠について史料紹介を行なう。なお天白を考える手懸りとして、甲州の天白祠を紹介し、併せて各地の天白祠の所在についてもふれることにする。

一 甲州下井尻村の天白祠

依田家文書の宝永五年「(下井尻村絵図)⁽³⁾」には、小高い岡の上に祠があり、背後に樹木が茂っている所がある。「てんぱく」と横に書いてある。その祠の北側には屋敷歩と書いてあるが、家屋は画かれていない。西側には家屋を画いてあり、北側は小物成林である。東側は恐らく林であろう。

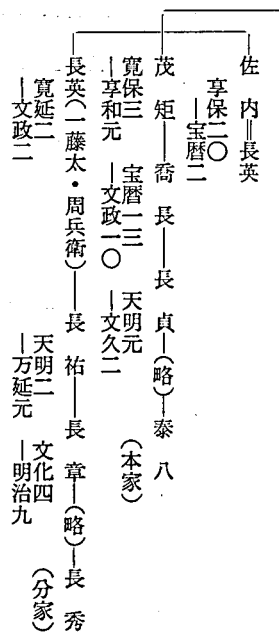
この「てんぱく」について、昭和二十七年刊「日下部町誌」⁽⁴⁾は下井尻御経塚として、「下井尻相畑の依田長秀宅地内に『天白さん』と称する御塚がある。これも経塚であって、同家では墓の貯蔵庫を造る為一部を掘った所、河原石に一文字づゝ書かれた径四五榎程の経文石が多数出土した。構築年代等一切不明であるが、経筒なども出土しない模様である」としている。

ここに記るされている依田長秀は依田家文書の依田家(本家)ではない。依田長秀家では依田分家と称している。同家には文書は全く残っていない。依田本分家の関係は次の系図の通りである。

長伯(助之進)

経長—長宗—長継—長安—矩長

寛永一八—延宝一一—正徳元
—元禄一〇—宝暦八—明和元



現在の依田本家では、長安を御先祖として意識している。⁽⁵⁾

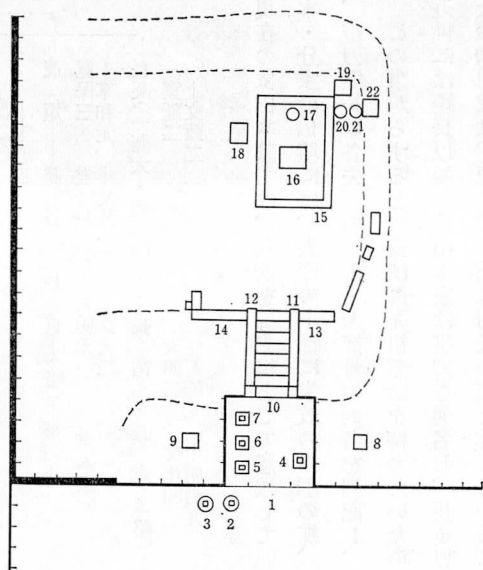
本・分家の仏壇には、表面の上部に家紋の揚羽の蝶、下部に依田佐太夫経長、与右衛門長宗、宗兵衛長継、民部長安、帯刀矩長の各夫妻の居士・大姉号の戒名を列記し、裏面にその歿年月、俗名を列記した、全く同様の位牌がある。この事からすると矩長は御先祖意識を持っていたのではないだろうか。

近世には矩長以後の依田本家は帯刀を襲名し、長英以後の依田分家は一藤太か周兵衛の名を使用している。なお依田家は、源氏で信州依田氏の出と称している。

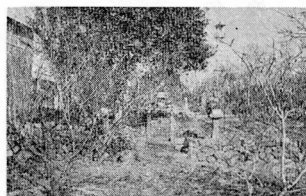
さて依田分家に赴くと、確かに天白祠があり、同家では屋敷神として扱っているようである。

祠は同家宅地の西側ほぼ中央にあり、外部から直接行くことはできない。祠は南面して低い岡の上にある。岡の西側は直ちに石垣で用水路があり、北東側は低い傾斜面で畑地に続く、南側には少しはなれて石垣が東西に走り、西は石垣が少し高くなって前述の用水路に至る。祠と石垣は石段で連なり、石段と石垣の間は少し平地があり、石垣はこの部分丈け低くなって、南の畑地に降りることができる。

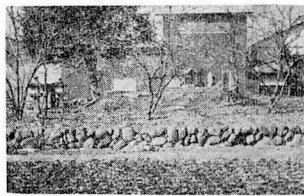
石垣が東西に走っているのは、村全体にみられる風景である。享保九年「村鑑明細帳」⁽⁶⁾によると、下井尻村は東西三四〇間、南北四四六間の村で全体に平地であるが、未申向に少し片下りの地形である。そして南北の高さは三七五〜四〇五メートルで、約三〇メートル北が高い。このため主に東西に石垣が作られている。勿論南北にも仕切って石垣が存在する。



第1図 甲州下井尻村天白祠概略図



第2図 天白祠正面図



第3図 天白祠東側面図



第4図 天白祠北東後部図



第5図 天白祠図

天白祠の概略図は第一図の通りである。全体にわたる測量を行っていないので正確ではない。それで第二～五図の写真により概略を再構成されたい。第二図は南正面、第三図は東側面、第四図は北東の後部を示す。第五図は南東部少し上方からみた神祠を中心とした図である。

第一図について述べると、(1)は三枚の石を並らべ、高さ約一〇センチメートルで、左右の石垣約七〇センチメートルよりは低いが、前の畑よりは高くなっている。この所をあがり、石段に至る平地の左右は約六〇センチメートルの石垣である。

前の畑にある(2)(3)は円錐台の石で、四角穴がある。石段下の平地の(4)(5)(6)(7)は角錐台の石で、矢張り四角穴がある。

(10)(11)(12)は石段で、(10)は八段、(11)には「宝曆三壬酉歳九月日」、(12)には「四半階石建立之依田民部源長安」と共に上部に刻んである。

石段前の両脇にある(8)(9)は、神前型の石燈籠で、基壇は平らな自然石である。左側の(9)の脚右側面に「主 依田周兵衛源長英」と刻んである。

(13)(14)は石段の上部両脇に連なる同質の石材である。左側(14)の石段に近い所は一部石を二段位垂直に重ねており、左端は奥に直角に列んでいたろうが、現在はその石が端に積重

ねられている。右側(13)の右端は直線に奥の方へ石が三、四個ばかりならんでいるが、岡の東側が低い坂になっており、土砂が崩れかけているので線は乱れている。なお岡の西側はほとんど坂をなさずに用水路の石垣に及んでいる。岡の上の平地の(15)は石段・両脇の石材と同質の石材で、長方形に中央を囲んでいる。北東の隅は少し崩れている。

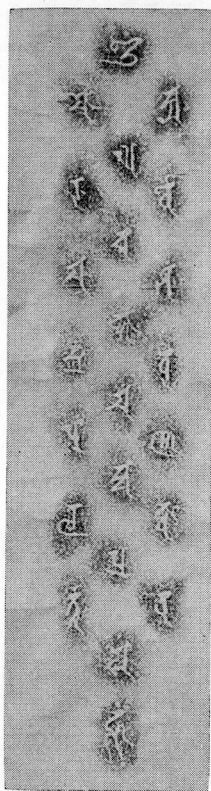
その中心と思われる所に、直方体の石の上に木製の神殿型小祠があるのが(16)である。(17)は(16)の直後、(15)の内部北限に自然石を縦にして建ててある。

(18)は石塔で、(15)の西外側、(17)と同じ位の位置にある。直方体の基礎の上に、反花があり、つぎに上部が四角錐をなしている直方体の四角柱がある。塔の正面に「奉順礼当国秩父坂東西国札所」、右側に「湯殿山大日如来」、左側に「南無観世音菩薩」、裏面に「享保七壬寅十二月吉日下井尻村依田氏」と刻んである。

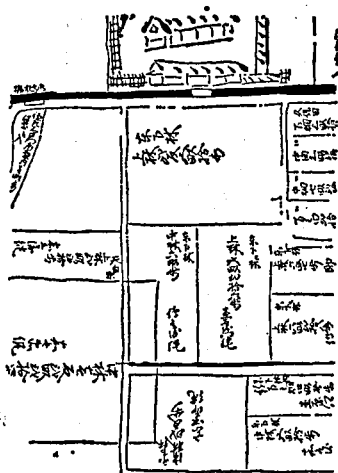
(20)は(15)の北列より少し後、すぐ東外側にある。直方体の石の上に石塔がある。石塔の正面には基部に、「依田周兵衛建之」と右から左に横に刻んである。その上部に帯の如きものを纏えし、頭に狐か狼か犬の如き動物の頭部が乗るかかっている女神像が浮彫されている。背面は荒彫の儘で、上部に行く程正面に近づけて薄くなっている。左右は平面で、右側に「明治三年載如月」と刻んである。

(20)は(15)の南列と殆ど同位置、東外側に並んでいる。自然石を二つ重ねたものである。これは昭和四三年調査時の位置である。同四五年には(20)の下のを除き、他は(19)左側に放り出されている。

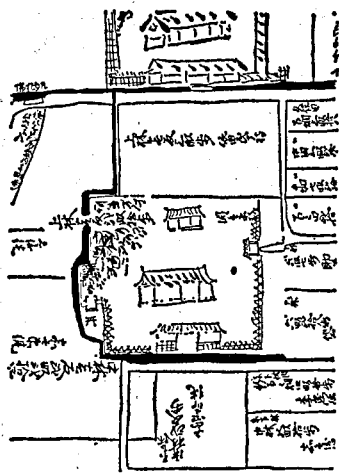
(22)は(19)の東側で、少し後の位置にある。直方体の石の上に、上部がゆるい四角錐をなす直方体の角柱が乗っている。石塔の正面には「奉唱光明真言三百万遍諸願成就祈所 願主源長英」、右側に「南無遍照金剛 干時天明丁未九



第6図 光明真言梵字図
(拓本)



第7図 依田分家附近図(A)



第8図 依田分家附近図(B)

月吉祥日」、左側に第六図に示す梵字「三三三」の光明真言、裏面には二行に「以我功德力如来如持力、及以法界力普供養而住」と刻んである。この石塔は昭和四三年調査時には前年の台風で下の土砂がゆるみ、東側の畑に倒れていたが、修復されたもので、その際に⁽⁸⁾が移動したのではあるまいか。

さてこれらの意味を考える前に、天白祠の景観の変遷を述べる。現在は⁽⁹⁾燈籠の所に椿と他に一本の木がある。岡の背後の果樹はまだ大きくはない。笹が生えてはいるが、大略露天といえる。宝永五年と現在の間ではどうだったろうか。

第七、八図は文政九年依田民部長貞「東下林絵図正下書」⁽⁷⁾によるもので、第七図は正徳元年検地の際の縄請を示し、第八図はそれに文政九年時の関係部分を張紙して示し、依田分家の概略が知られる。なお上部に一部示されている家屋は依田本家である。

天白祠は樹木が茂り北に竹藪が続いている。祠の前に鳥居があり、分家の塀は天白祠東脇に至るから、外部から直接参詣できる。⁽⁸⁾

なお第七図の上林式畝式拾歩嘉兵衛縄請地に天白神とある

が、第八図の祠は中林宅反式畝式拾四歩嘉兵衛繩請地に当る。この点について依田民部茂矩「東下モ林絵図」⁽⁹⁾では、上林式畝式拾歩の地に祠と二基の石燈籠があつて樹木が祠を覆い、東側には竹藪がある。そして中林宅反式畝式拾四歩の地に鳥居がある。これと現在の地形からみて、天白祠は移動したのではなく、第八図の合せ方の誤りと考えた⁽⁹⁾い。

この現在は消滅している鳥居については、井尻家文書の文化元年「見聞記録帳」に、「表銘ハ不写 文化八末年之春天白大明神前鳥井建立 願主周兵衛 大工林蔵、久蔵、仲右衛門、勘之丞 建柱之上はそ木其外へ年号其外大工名等記を見受候」とある。分家の長祐の建立であらう。

以上の事を前提として、刻まれている文言などについてみると、先ず(2)~(7)の石は何んらかの礎石で、一部は鳥居のものだろう。

つぎに石燈籠(9)にある依田周兵衛源長英は分家の長英である。この燈籠に関連して、下井尻村の氏神である菅田別神社白幡大明神の拝殿前には、基壇が二段の直方体である同型式の石燈籠がある。右側の燈籠の脚正面には「永代常夜燈」、右側面に「依田与右衛門」、左側面に「安永三年甲午二月 願主依田帶刀」、裏面に「依田周兵衛」と刻まれている。左側の燈籠の脚正面に「奉納太広前」、右側面に「天明八戌甲歳十一月吉旦」、左側面に「願主井尻亀吉」、裏面に「井尻仙蔵」と刻んである。この石燈籠は依田、井尻両家の本分家が協力して建立したものであるが、様式、字体からみて、天白祠の燈籠もこれと同時期に建立されたと推測される。

宝暦三年に建立された石段(10)の脇(12)にある依田民部源長安とは、長英の祖父である。彼は宝暦八年歿であるから、晩年の仕事といえる。

(13)(14)の石材も、宝暦三年に石段と共に作製されたと推測される。(13)(14)は前面を整えるためであるが、(13)の右端は

奥迄及んではいたかもしれない。後考にまちたい。

木製小祠^⑧は拝殿で、自然石^⑨が天白の御神体であるまいか。

享保七年依田氏建立の奉順礼当国秩父坂東西国礼所の石塔^⑩は、文書の面で長安が宝永七年・正徳四年に秩父順礼、正徳四年に坂東順礼湯殿山参詣、享保六年西国順礼の事実が知られている。更に依田本家には縦約二七センチ、横一四センチと、縦約三三〇四センチ、横一〇センチ位の板がある。各々四隅に穴があり、上の穴には紐を通してある。裏面上下に添木がついている。その表面に各三行にわたって「宝永七庚寅年、奉順礼秩父坂東西国百三拾三所、甲斐国山梨郡下井尻村住依田氏」、「宝永七庚寅年 依田与右衛門、奉順礼当国秩父坂東西国百三拾三所、甲斐国山梨郡下井尻村」と記るしてある。兩者共に長安の筆と考えられる。前者は家族が、後者は長安が使用したと推測される。

従ってこの石塔は、宝永七年に一念發起した諸順礼が享保六年に成就し、その間に湯殿山にも参詣したことを記念して、長安が建立した回國順礼塔である。なお三界万霊塔的な性格も持っているかもしれない。⁽¹⁰⁾

石塔^⑪は明治三年であるから、分家の長章が建立したものであろう。天白の具象化とも考えられるが、石垣^⑫の外にあることでもあり、後考にまちたい。

⑫の石の意味があるものかどうかは不明である。

天明七年建立の奉唱光明真言三百万遍諸願成就所の石塔^⑬は、分家の長英によるものである。これは光明真言塔の類ではないだろうか。恐らく光明真言を一念奉誦する講中が長英を中心に成立していたらう。

なお依田分家には天白祠から出土した小石が保存されているが、「譬」「十」などの文字が墨書されている。これが天白信仰に関係があるのかは不明である。若し関係なしとすれば、本来別のものに天白信仰が乗っかったことにな

る。⁽¹¹⁾ いずれにせよ宝永五年には天白祠であった訳である。

現在の依田本・分家は共に、天白祠に特別の信仰はもっていない。

以上によってこの天白祠が、何時から依田家と関係をもつかが問題になる。

二 依田家

既に系図により若干記したが、依田家について考える。依田本・分家附近の概略は第九図の通りである。

依田本家は屋敷二反七畝一五歩(A)にある。⁽¹²⁾ 依田分家は中林六畝歩(巳)と上林五畝二六歩(申)の全部、及びその周辺にある中林二反五畝一〇歩(酉)の内で南部の一反二畝一〇歩・上林二畝二〇歩(戌)・中林一反二畝二〇歩(申)の各(巳)(申)寄の部分にある。天白祠は(酉)の依田分家分にある。⁽¹³⁾

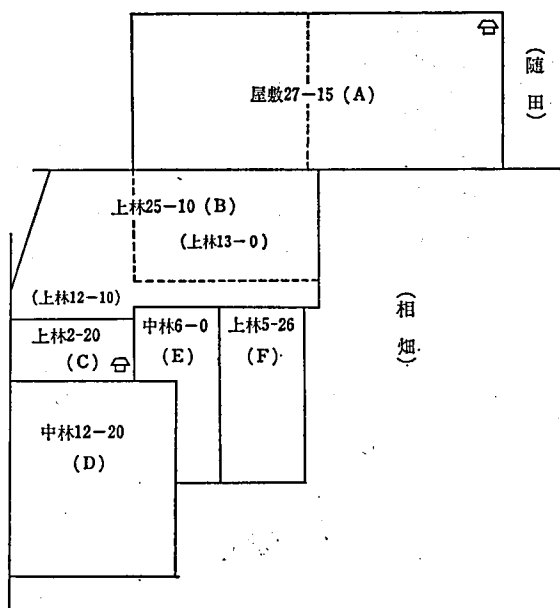
(A)と(酉)の間に青梅街道があり、(A)は字する田、(酉)以下は字相畑である。

明治五年には本家は居家二軒、土蔵六棟、長屋一棟、物置二棟、分家は居家二軒、土蔵二棟、長屋一棟、物置一棟が建っている。

正徳元年「甲州山梨郡栗原筋下井尻村田畠検地水帳」による縄請人は、(A)(酉)与右衛門、(戌)(申)加兵衛、(巳)伝兵衛、(申)左右衛門である。与右衛門が依田長安であるから、正徳元年には天白祠と依田家に、後年の屋敷神としての関係はない。

依田本家(A)のうち、点線より左部分が塀で囲まれた宅地である。文政九年の絵図では(A)の北東の隅に繁みがあり前に鳥居が画いてある。

現在でも事情は変わらず右部分は果樹園で塀の外にあり、繁みと鳥居はないが、周囲より少し高くなった場所に木製の



第9図 依田家附近概略図

神殿型小祠があり、小祠の後に長方形の石塔がある。塔の正面には「権大僧正一峰常心法印 十八日」、右側面に「屋敷守神」と刻んである。この石塔が何時建立されたかは不明であるが、本家では「お荒神」と称している。¹⁴ 従って現在でも塀の外にある。¹⁵

享保二〇年依田与右衛門「万日記」の一月二八日の条には、「ちんじゅうじん様祭り」として男女遊とあり、寛政一〇年依田帯刀「日記差引帳」の一月二七日には荒神様御日待、翌二八日は「鎮守荒神祭付遊ぶ」とある。天保七年「歳中諸日記」の一月二七日には、例年通り「三宝荒神様御祭勤行」、翌二八日には「三宝荒神様祭り家内不残遊 祭主加藤内蔵助」とみえているので、本家では一月二八日に鎮守三宝荒神を祭っている。

従って依田家の屋敷神はこの三宝荒神で、分家が出てからも本家はこれを祭り、分家は屋敷神として天白祠を祭った訳である。

さて依田家で、分家が天白祠の近くに居住する迄の

経緯について考える。「依田民部一代記」「依田家先祖書并長安御心得書」によると、長安（延宝二年生）の持高は元禄一〇年には下井尻村のみで高三三石余、享保一四年には村外も含めて高二〇五石余に達した。この間の享保元年に長男助之進が歿し、享保一四年に二男矩長（正徳元年生）に家督を譲って隠居した。その際の隠居分は、同家持高の約半分の高一〇〇石余である。

甲府城勤番野田成方の宝暦二年壬申序「裏見寒話」には、長安は依田民部として「富有」の一人に数えられている。¹⁶⁾

つぎに文政九年「分家一藤太始終」によると、隠居後の元文四年に孫の佐内（享保二〇年生）が不具者であったので、「依田佐内江東下林ニ而上林式反五畝拾歩南之方隠宅普請出来候へ、隠居跡式定相統為致候積ニ相定候事」とし、延享五年「隠居跡譲り状」には「左内居屋敷者道下上林式反拾五分場所ニ可致普請候」とある。これは④の場所であり、当時長安は七五歳である。

本家は茂矩（寛保三年生）が継ぐことにした。宝暦二年に佐内が歿したので、これに先達って一藤太（長英、寛延二年生）を左内の養子と定めた。¹⁷⁾

再び「分家一藤太始終」によると、「東下林式反五畝拾分之隠居屋宝暦元未年、四戌年迄普請済」であるから、④の場所に建ったことは事実である。ついでこれを宝暦元一二年の間を考えながらも、確認することを躊躇している形跡がある。この事は、依田分家の位置が④⑤を中心、④⑤⑥の一部に及ぶので、④以外の場所は宝暦八年長安歿後の建築ではないかと推測される。文政九年には隠居屋と分家全体の家屋の建築年月とが混乱したからではないだろうか。後考に待ちたい。

少なくとも天白祠の石段は長安により宝暦三年に建設されたのであるから、この時期が屋敷神化の第一歩で、諸石

塔が分家の人々による理由が理解できる。

安永二年依田家持高は本家二八五石余（内下井尻村分一三七石余）、分家二五三石余（同上二〇〇石）であり、文化一二年持高の全体は不明であるが、下井尻村分持高は本家一二八石余、分家一〇七石余である。この経済力が天白祠の遺物を作ったのである。

では享保七年の石塔が最初から天白祠に在ったかが問題である。

三 浄秀庵

前述の通り長安の長男助之進長伯は享保元年に歿し、法名は寂光院俊峯浄秀居士である。長伯と元禄八年に歿した長安の弟藤之進、法名花林浄香信士との菩提のため、浄秀庵が建立された。

享保九年「村鑑明細帳」⁽¹⁸⁾には

山梨郡西後屋敷村清白寺支配

一境内中林五畝拾五歩

浄秀院

右浄秀院十ヶ年以前申年当村雲光寺隠居所ニ建立仕候宗旨ハ村内ニ組入差上申候とあるから、享保元年の建立である。

庵の位置は享保一九年「浄秀庵江寄進帳」に、「式反五畝十分之内寺中之内 一上林五畝拾八歩 米貳斗六升六合七勺」とあり前述文政九年の絵図には(B)の、(C)に直ぐ連なる部分に、「元寺地浄秀庵五畝拾分と仕切」と記るされているので、位置は天白祠の北の(B)にある。「村鑑明細帳」の中林は上林の誤と考えたい。

「依田民部一代記」によると、浄秀庵の印判は長伯が生前使用したものである。

庵の建物は、依田家が宝永五年に建築した三間半・五間の家屋を引移したものである。享保一八年には観音殿を普請した。「依田家先祖書并長安御心得書」によると、観音殿は三間四尺四面で、享保一九年に石和代官小宮山奎之進に願って入仏開帳している。再び「依田民部一代記」によると、同二〇年には庵を建直し、他に格間、九尺貳寸・貳間の二階土蔵を普請する。そして同年迄に下井尻村外二カ村の田地を寄進し、普請・田地代総額は新甲金三四五兩貳朱に達し、将来は寺にする積である。

元文四年「茲眼和尚入庵之文」には、庵を結んで道場とし、先祖代代の生靈頓証菩提のため観音大士靈像を安置し、「日々参詣者無貴無賤平等利益之道場」とある。

ついで延享四年には庫裡を普請し、寺中の地を拡張した。

しかしながら寛延三年には、新寺建立の訴人があり、院号取消を願出たが、結局同四年二月西後屋敷村清白寺へ引移を命ぜられた。以後浄秀庵は再建されず、⁽¹⁰⁾そのため長安は「子々孫々ニ至候而も、小分之庵成とも堂たり共建立致間敷候、建立いたし而へ家之障り成候間、堅相守可申者也」と記している。

さて享保七年の石塔は、この浄秀庵にあった可能性もある。太白祠のある土地が、何時依田家の手に入ったかも問題であるが不明である。庵と石塔の関係も現在の所不明である。

四 甲州の太白祠

この下井尻村の太白祠の他に、甲州に太白祠は存在するであろうか。甲州の神社についての全般的な調査は、慶応四年「甲斐国社記・寺記」第一卷神社編と⁽²⁰⁾「神社明細帳」⁽²¹⁾があり、文化一一年序「甲斐国志」もある。

慶応四年「甲斐国社記・寺記」には

- 1 巨摩郡武川筋宮脇村（現北巨摩郡武川村） 天白社 大己貴命（除地）
- 2 巨摩郡武川筋白須村（現北巨摩郡白洲町） 天白社（除地）
- 3 巨摩郡武川筋下円井村（現北巨摩郡葦崎町） 天白社
- 4 巨摩郡逸見筋村山西割村（現北巨摩郡高根村） 天白社
- 5 巨摩郡逸見筋村山北割村（現北巨摩郡高根村） 天白社
- 6 巨摩郡西郡筋長沢村（現北巨摩郡高根村） 天白社（除地）
- 7 巨摩郡西郡筋宮沢村（現中巨摩郡甲西町） 天白大明神（朱印地）
- 8 巨摩郡西郡筋湯沢村（現中巨摩郡甲西町） 天白明神 御食津神
- 9 巨摩郡中郡筋二日市場村（現甲府市） 天白社（社地）
- 10 巨摩郡中郡筋紙漉阿原村（現中巨摩郡昭和村） 天白大明神 素盞鳴尊
- 11 巨摩郡中郡筋高畑村（現甲府市） 天白社 保食命（黒印地）
- 12 巨摩郡北山筋德行村（現甲府市） 天白明神
- 13 巨摩郡西河内領福士村字切久保（現南巨摩郡富沢町） 天白大明神 月夜見命
- 14 巨摩郡西河内領福士村字上徳間（現南巨摩郡富沢町） 天白権現 月夜見命
- 15 巨摩郡西河内領福士村字御堂（現南巨摩郡富沢町） 天白大権現 月読尊
- 16 巨摩郡西河内領福士村字棚下（現南巨摩郡富沢町） 天白権現 月読尊
- 17 巨摩郡西河内領福士村字神田（現南巨摩郡富沢町） 天白大権現 月読尊
- 18 八代郡東川内領井出村（現南巨摩郡南部町） 天白天神宮 天穗日命

- 19 八代郡東川内領芝草村カ（現西八代郡下部村） 天白天神 菅原大神 五条天神
20 八代郡東川内領大磯村カ（現西八代郡下部村） 天白天神
21 八代郡小石和筋小石和村字向田（現東八代郡石和町） 天白社 伊弉諾尊 伊弉冊尊 素盞鳴尊（除地）
右の内で7は本殿がなく御霊石丈けを玉垣で囲み、8は天白という地名の場所にある。11の黒印地は、反別の内で
榎四俵余分は同村曹洞院茲元院で収納している。

つぎに「神社明細帳」には

- 22 北巨摩郡穴山村字重久（現北巨摩郡葦崎市） 天白社 稻倉魂命（境内神社）
23 北巨摩郡安都那村箕輪組字宮地（現北巨摩郡高根村） 天白社 大宜津姫命（境内神社）
24 北巨摩郡日野春村長坂上条組字久（現北巨摩郡長坂町） 天白神社 倉稻魂命（境内神社）
25 北巨摩郡秋田村大八田組字米山（現北巨摩郡長坂町） 天白稻荷社 宇賀乃売命（境内神社）
26 北巨摩郡秋田村夏秋組字宮久保（現北巨摩郡長坂町） 天白稻荷社 宇賀乃売命（境内神社）
27 北巨摩郡大泉村谷戸組字御前（現北巨摩郡大泉村） 天白社 受持命（境内神社）
28 北巨摩郡駒城村横手組字久保頭（現北巨摩郡白洲町） 天白社 素盞鳴命（境内神社）
29 北巨摩郡円野村入戸組字天神沢（現北巨摩郡葦崎市） 天白社 豊受姫命（境内神社）
30 北巨摩郡竜岡村下条南割組字石宮（現北巨摩郡葦崎市） 天白神社 豊受姫命（境内神社）
31 中巨摩郡五明村字清水地内字川原田（現中巨摩郡甲西町） 天白社 天御中主命（無格社）
この内25は明治六年に「路傍ヨリ当社内エ遷座」したもの、26も村内に鎮座していたものを他神と共に合祀したものである。なお北巨摩郡安都那村長沢（現北巨摩郡高根村）には大・小天白社があり、共に保食命（境内神社）であ

る。これは6に当ると考えられるが、小太白社が含まれているかどうかは後考にまきたい。

10は字新時にあり、受持神(村社)で祭神が変っている。

文化一二年序松平定能撰「甲斐国志」⁽²²⁾では、7は太白ノ社、10は太白明神(朱印地)、11は太白神社で、祭神は共に記されてはいない。また昭和三年刊「中巨摩郡志」⁽²³⁾では、7は太白社、天御中主命、10は太白神社、素盞雄命とある。以上の事からすれば、神社名については太白以外は随時変更し、祭神は一定していない。

「甲斐国社記・寺記」と「神社明細帳」の太白祠が、両者余り重複がなく、両者共に下井尻村の太白祠を収録していないことは、甲州の太白祠が路傍や屋敷神として個人の屋敷内にある場合のあることを推測させる。それで前述のもの以外にも存在する可能性がある。現在の所では、信州寄の地域に最も多く、西部から東部に移るに従って少ないといえる。

五 主として地誌による太白祠の分布

太白とは何であろうか。太白については、柳田国男「石神問答」⁽²⁴⁾に關東諸国の太白社としてとりあげられたのが最初の研究である。柳田氏は「太白の字に即きて臆測の説多し(中略)結局殆ど其端緒をだに得ず、唯此神の古きことのみ疑なし」「分布弘き神に候が、若しや風の神にては有之まじきか」とし、東海道で太白、大太白、天博、天縛、武藏で大天獏、大電八公、相模で天獏魔王、遠江で天白天王、尾張で手白、志摩で天魄、奥羽で大天博、大天魔狗、大天馬、大天場の字を宛てることを指摘した。

この研究を堀田吉雄氏が進められた。堀田氏の研究によると、太白を本来は女性と判別し、最初は陰陽道の方伯神的性格が強いと考え、強い神様とされ、ついで地名、旧跡を含めた採訪から手白を含めて、志摩七、伊勢一三、尾張

一、三河三、遠江二二、駿河一、信濃四七、越後一、相模二、武蔵二三、陸中一、計一一一社を紹介され、この他に信濃では百数十社を予想している。

ここでは柳田、堀田両氏の研究によりながら、主として地誌により各地の天白祠の分布を考える。作業に入る以前に、甚だ素朴な疑問であるが、天白がなぜ各種の名称になるのか、そのなかでも天白と天馬は同系統かなどの問題を感じず。

この柳田説の可能性について井上増次郎氏の御教示をうけたので、それを紹介する。

井上氏は音韻形態から、(1)tem-paku, tem-baku, tem-ba, etc. のような音韻形態のずれが可能であること、(2)「白」「博」「猿」「魄」「魔狗」などの文字は宛字に過ぎないことを指摘された。その理由としては、おそらく tempaku が日本語の音韻形態としては最も普遍的ではないかと思われるが、tem-baku も可能な形である。「白」は [haku] が基本形であるが、「三白」「潔白」もあり、「三白」「三杯」もある。h < b どちらの場合であっても tem は tem- に変るのが当然である。

tem- になった場合に、これに続く paku, baku の p, b は h に同化されて tem-maku になる可能性がある。
(「展望」と「本望」)

次に -paku, -baku, -maku の最後尾音 [ɐ] は、その音節にアクセントがないから不明瞭になる。「菊」「聞く」などに見られる現象で、即ち kiku → kiku-ɐ になる。土佐の方言では、この [ɐ] は割合にはっきり残る。申し遅くれたが私は土佐の者である。このことが疑問を生じさせた原因であろう。

このように kik- になった場合、最後の密閉音 [ɐ] は必ずしも明瞭に聞えない。密閉音で終る語の一般的な傾向である。(英語の mat, hit, cook などにも同じ事実が認められる)。

右のように考えれば *tem-paku*, *tem-baku*, *tem-ba(k)*, *tem-na(k)* のように音韻がずれる可能性は認められる。そうだとすると、宛字として「天馬」をあてがったことにも一応の理由はある。「天馬」の宛字を使用している地方では、*tem-ba(k)*, *tem-na(k)* の最終音が無視される程弱化したことが推定可能である。

なお「天白」に「大天白」が併合しているなら、「天馬」に「大天馬」も併行する可能性がある。「大」は *conflict* に過ぎないと思われる。

以上は音韻形態だけの推定で、極め手としては天白の民間信仰としての様式に類似性があるかないかである旨の御教示をえた。

さらに手白については、*tem-paku* が *tehaku* に移ることは音韻現象としてはあり得ない。しかし文字「手白」を *tenFaku* (F は両唇摩擦音、p は両唇破裂音) とよむ可能性はある。

もし「手白」と書いて *tenFaku* とよんでいたとするなら、理由としては(一)「天」が「手」になったのは、文字「天」が「て」(e)の形において「手」を連想させたのではないか。(二) *temari* (手鞠) と *temmari* (*temmari*) の併行形からの類推として、*te-ien* の現象が生じたのではないか。日本語では文字(漢字)とその音韻の結合が不安定なので(つまり宛字が多い)、問題は簡単に解決されない旨の御教示を得た。

以上の点に留意しながら柳田説により、天白の分布を考える。

先ず「神社明細帳」については、県内分全部が残っていない場合もあるが、山形・茨城・群馬・東京市・神奈川・千葉・新潟・石川・福井・奈良・京都・大阪・和歌山・鳥取・山口・福岡・佐賀・長崎・大分の各県では天白社はみられない。神社明細帳の性格もあることであるから絶無とは断定できないが、乏しいのではあるまいか。宮城・愛知・埼玉の各県ではみられる。この三県の「神社明細帳」と各地誌、及び堀田氏の研究によって判明する分は次の通り

である。

(一) 志摩

宝暦年間の藤堂元甫「三国地誌」⁽²⁶⁾には、答志郡四(天魄)があり、堀田氏の研究によると、答志郡四(天白)、英虞郡一(天白)があり、合計九社ある。以下郡は省略する。括弧内の祠名が天白の場合は同じく省略する。なお志摩地方の天白の屋敷神については直江広治氏の研究がある。⁽²⁸⁾

(二) 伊勢

「三国地誌」によると、河曲二(天白天神一)、鈴鹿五、菴芸三(天白天皇)、安濃一(天白天王)、一志一、飯高一、飯野二、多氣一があり、堀田氏はこの外に飯高一、一志一、河曲一、三重二、員弁六を紹介している。合計二十七社。

安永六年谷川士清「倭訓栞」中編に、「てんばく、伊勢国の諸社に、天白大明神といふもの多し、何神なるを知らず、恐くハ修験家に天猿あり、是れなるべし」⁽²⁹⁾とある。

(三) 尾張

宝暦二年序松平秀雲士龍撰「張州府志」⁽³⁰⁾、文政五年樋口好古「尾張徇行記」⁽³¹⁾、天保一四年序深田増蔵正韶撰、中尾八郎左衛門義稲・岡田六兵衛啓輯「尾張志」⁽³²⁾には、三者共通のものとして、愛知一、春日井一、中島一(手白明神)があり、「張州府志」「尾張志」共通で知多一(天博)がある。この外に「尾張志」に春日井一、丹羽一、知多一、中島一があり、「尾張徇行記」に愛知一、知多一(天馬駒大明神、これは地藏堂にあるので地名は天白地藏である)がある。合計九社で、「神社明細帳」には三社があるが、すべて前記のものと重複している。この他に愛知郡に天白村があるが、地名のみで社は不明である。

なお手白明神について「張州府志」は、「按。手白神名不見出處。丹波國愛宕山。旧名手白山。然則愛宕別名耶。或曰。手白作_二太白_一。祀_二大白星_一。大与_レ天点画相近。訛耳_三」⁽³³⁾としている。

(四) 三河

「三河志」⁽³⁴⁾には見当たらない。「神社明細帳」には、幡豆_二、額田_二、豊橋市_二、八名_三、渥美_二、東加茂_二、計一〇社がある。この他に堀田氏は豊橋市で地名のあることを示している。

(五) 遠江

寛政元年序内山直竜稿「遠江国風土記伝」⁽³⁵⁾には豊田四、周智一がある。この他に堀田氏によると、浜松市一、磐田七⁽³⁶⁾、浜名五、引佐三、小笠原二、榛原二、周智一がある。合社二六社である。なお豊田郡は現在では磐田郡に含まれている。

(六) 駿河

文政元年序黙齋桑原藤泰「駿河志」⁽³⁷⁾、文久元年序中村高平「駿河志料」⁽³⁸⁾、天保弘化年間の新庄道雄「修訂駿河国風土記」⁽³⁹⁾、贅川良以著・贅川他石補綴「修訂駿河国風土記(統篇)」⁽⁴⁰⁾が太白についてふれている。

「修訂駿河国風土記」には一五社(志太三、益津三、安倍一、有渡五、廬原一、富士一、駿東一)の存在を述べているが、所在を記しているのは益津三、有渡三(天白大明神二)、安倍二(渡天白大明神一)、廬原一のみである。

それで「駿河記」「駿河志料」について、両者にみられるものをA、前者のみをB、後者のみをCとすると、志太A二・B一・C一、益頭A一・B二、有渡A四(天白天王二)・C一、安倍A一(駿河記天白、駿河志料天白天神)・B二(渡天白)・C一(天白天神)、廬原A二(天白天王二)、富士A一(天白天王)、駿東C一で、合計一九社ある。

風土記のみにみられるものはないが、有渡Aの内では天白でなく、天白大明神となっている。この他に堀田氏は静岡市で地名一例をあげている。

(e) 伊豆

寛政二二年序秋山富南、明治期萩原正平・萩原正夫増訂「増訂豆州志稿」⁽⁴¹⁾には、君沢一(天白権現)、賀茂六(天獭二)、合計七社がある。

(f) 相模

天保二二年「新編相模国風土記稿」⁽⁴²⁾には、足柄一(天獭魔王)、大住一(天獭)、合計二社があり、前者には「村民私に祀る」とある。堀田氏によると、後者も屋敷神である。

(g) 武蔵

文政年間「新編武蔵風土記稿」⁽⁴³⁾には、足立一(大天八公)、多摩一(稻荷竜天白山相殿)、比企二(手白明神、大天)、埼玉二(大天獭)、大里一(大天獭)、男衾一(大電八公)、幡羅五(大電八公^{ダイセンハコ}、大天獭二、大天白一)、榛原一(大電八)がある。この他に「神社明細帳」には北埼玉一(大天白)があるので合計一五社になる。なお「神社明細帳」には、前者と重複する三者があるが、前者の埼玉一(大天獭)は大天白、足立一(大天八公)も大天白、比企二(手白明神、大天)は手白、大天獭になっている。

(h) 甲斐

前述の通り約三一社ある。

(i) 信濃

享保九年序「信府統記」⁽⁴⁴⁾には、松本藩領の松本一、筑摩一六(大天白四)、安曇二二(大天白七)があり、その内

で安曇九は百姓屋敷内にある。

なお東筑摩郡における天白の屋敷神については、堀一郎氏の研究がある。⁽⁴⁵⁾

つぎに明治一一五年「長野県町村誌」には、上水内一三(狗天白一、十二天白一)、更級三、小県三(天白大神一)、北佐久二(大天白一)、北安曇二、南安曇一、東筑摩三(天白宮一、大天白一)、諏訪九(天貳一、北天白一、天白七五三一、大天白二)、上伊那一六(天狗天白二、天伯松尾一、天白天二)、下伊那二がある。なお天伯は天白と考えて註記しなかった。東筑摩郡の天白宮は屋敷神である。この四五社は前記「信府統記」の二九社とは重複しない。

この外に「上田藩村明細帳」⁽⁴⁷⁾には、宝永三年であるが更級一がある。なお同年小県二(大天白一)は「長野県町村誌」と重複しており、祭神は明細帳の天白宮、大天白宮が、町村誌では天白大神社、天白社となっている。

さらに堀田氏の研究によると、右の外に更級一、東筑摩五(大天白一、大天白稻荷大明神一、大天白稻荷姫大神一)、下伊那三(富士天白一)がある。東筑摩の内二は祝殿であり、下伊那の遠山祭における天伯の役割については、中村たかを氏の研究がある。⁽⁴⁸⁾

つぎに水野都沚生氏は下伊那九(天白山一)、大原茂久氏は同二(天白大山祇の神一、天白水神一、前者は大原家氏神)を紹介し、水野氏は下伊那郡内に四六カ所の関係地名のあること、天白社の殆が天竜川流域に集中している点を指摘している。合計一〇二社あり、まだ存在する可能性がある。⁽⁵¹⁾

㊦ 越 後

堀田氏によると中頸城一がある。

㊦ 陸 奥

天白祠と甲州依田家(藤村)

広瀬典編「白川風土記」⁽⁵²⁾には、岩瀬一（大天神明）がある。安永四—六年「風土記御用書出」には刈田一（大天白）、栗原一（大天馬堂）、志田一（大天羽堂）がある。志田郡の大天羽堂は仏閣であるが、「神社明細帳」には村社大天馬神社とある。この他に堀田氏は陸中の上関伊一（大天馬）を、板沢家の氏神として紹介している。合計五社。以上によって二二三社の天白祠は志摩、伊勢以東の諸国にあり、東国でも日本海沿岸には殆んどみられない。関東では、武蔵相模以外は殆んどなく、東北地方も多くはないことが分かる。⁽⁵⁴⁾

六 祭神と信仰

甲州下井尻村の天白については、依田分家に天白大明神の懸け軸があるが、具体的な民間信仰の様相については知ることができない。

甲州の天白祠の祭神については、「甲斐国社記・寺記」などによると、月夜見命五、保食命三、素盞鳴尊三、豊受姫命二、そして大宜津姫命、受持命、大己貴命、天御中主命、御食津神、天穗日命、菅原大神・五条天神、伊弉諾尊・伊弉冊尊が各一であることが知られる。残りは不詳である。

甲州以外は「神社明細帳」「長野県町村誌」などによると、二六神がある。その内で、大山祇命、天白羽神、手白香姫命、大元尊、天照皇大御神、大日靈命、市杵島姫命、猿田彦命、磯（五十）猛命、長白羽神、棚棧姫命、瀬織津姫命、高津鳥命、少彦名神、菅田別尊、天老男命、天白姫命、天香々背男、国常立尊、大国主命の二〇神は甲州にない神である。

逆に甲州にのみ見られるのは、月夜見命、保食命、豊受姫命、大宜津姫命、受持神、御食津神、菅原大神・五条天神、伊弉諾尊・伊弉冊尊である。

祭神については不詳の場合が多い。判明していても次のような場合がある。安永四年「風土記御用書出」には、陸

奥国志田郡長尾村の大神羽堂について先年空勸請ニ付本尊無御座候」とある。⁽⁵⁵⁾これを「神社明細帳」には、大馬神社として「其年月不詳ト雖源義家東夷征討ノ際之ヲ勸請セリト古老ノ口碑ニ伝フ」、祭神は大国主命とある。従つて祭神は甲州以外でも変更されることがある。

祭神が右の通りであるすれば、民間信仰の内容が問題である。まだ下井尻村の天白については不明であるため、地誌にみえる具体例を紹介するにとどめる。

「駿河志料」卷十一の駿河国志太郡柳新屋村の天白社には、「本国十五ヶ所に祭れり、高平按に天一神^天一太白^星 此二神を祭れるならん、倭名鈔に、百鬼経云、天一神^{和名奈加美} 天女化身、又同書ニ太白皇星一名長庚星、暮見^西方^一為^二長庚^一 此間^{由不}豆^豆とありて、拾芥抄^末下方角禁忌の条にも、天一太白方事は、陰陽博士の説を準、中古尊奉せし事なれば、此神を辺鄙の地までも奉祀せしならん」とある。⁽⁵⁶⁾同書卷十八の有渡郡栗原村の天白社には、「長者屋敷の地神なりと云」とあり、富士居と称し富士城姫の住居跡と云れ、米倉の焼跡と思われて焼米が出土するとしている。⁽⁵⁷⁾つぎに「修訂駿河国風土記」卷二十の駿河国鹽原郡牛ヶ谷の天白社には、「里人天白社に腫物の平愈をいのるにしるしあり」とある。⁽⁵⁸⁾

さらに、「神社明細帳」の愛知県春日井郡品野村大字下品野字山崎の天白社（境内神社）には、「夏日旱スル時、村社ニ降雨ヲ祈リ倘シ雨降ラザレハ、此神ニ祈願スヘシ、必雨降ルト古老ノ申伝エニ因テ、例年旱水ノ節ハ此神ニ祈ルニ、雨降シメ賜フ事実ニ尊シ」とある。

また「神社明細帳」の埼玉県武蔵国北埼玉郡羽生町大字竊沢の天白社には、「弘治年間水戸伊豆守忠朝ノ夫人安産ノタメ信仰、同村へ鎮座以降、衆庶ノ婦人陸續今ニ信仰スルナリ」とある。

この他に、水野都汎生氏は主として長野県上・下伊那郡の天白について、「もともと大山祇の神であり農耕の田の

神であると同時に耕作に欠くことのできない水の神、瀬織津姫ノ命である⁽⁹⁾」としている。

ところで下井尻村の天白祠が、依田分家の屋敷神化したことは既に記した通りである。天白の屋敷神は志摩、信濃、相模などでも知られている。

下井尻村には天白以外の屋敷神が存在する⁽¹⁰⁾。しかし全村にわたる屋敷神の調査を行なっていない。それで依田家を含めて、村全体での屋敷神と本分家関係がどうなっているかについては、本稿では触れることができなかった。

註

(1) 文部省史料館蔵、「史料館所蔵史料目録」五・一三集所収

(2) 文部省史料館蔵、「史料館所蔵史料目録」一三集所収

(3) 以下、依田家文書による場合には註記しない。

(4) 「目下部町誌」四〇四頁

(5) 長安についての依田本家の伝承は「箕のような手で、ごく働き、小作米は米倉に入りきらず、徳塀に積重ねておいたが、子分が夜盗にきても、雀がきた、すておけすておけといった」と言う。

(6) 「目下部町誌」一一五頁

(7) 依田分家での聞取では、昔の話ではとして、依田分家だけでなく、他からも参詣者があったそうである。

(8) (9) 「分家周兵衛道潰一件願書諸書類」に含まれている。

(10) 下井尻村字中沢西には、二つに折れた石塔がある。表面

の中央には「〇三界万霊塔」と大書し、その右側上半分に

「湯殿山 坂東、同じく左側上半分に「大日如来 秩父」と少さく刻んである。そして右側面には「時千元文元歳八月大吉」と刻んである。石塔は下井尻現住の神主村田五郎兵衛氏の先祖が建立したといわれている。また宝永八年四月下井尻村「村法度」には、「伊勢参宮富士参詣有之者、先規之通、村中してそうじ可勤之、尤同所江留守行はなむけ堅停止可仕候事」、「秩父坂東西国四国順礼之儀へ、父母之為菩提之ニ相勤候へハ、そうじ酒迎并留守行はなむけ堅停止可仕候事」、「御嶽ごたち之儀へ、先年相定候通、組切ニそうしかる可仕候事」とある。

従って宝永七年の依田長安の発願は、当時下井尻村で一般に行なわれた信仰によるものだろう。

(11) 篠田徳登「古墳発掘」伊那一九卷一号には、「天白様にどいて貰い」として、長野県上伊那県宮田村に、古墳の上に天白祠が祀つてある旨を報告している。

(12) 絵図によつては、(A)に示した区轄内で、その北東の隅に近い部分に、中畑一四歩与右衛門繩誦地を記している場合もあることを付記しておく。なお北東隅の屋敷神祠は中畑一四歩に含まれない。

(13) 上林二畝二〇歩のは、慶長古検では屋敷二畝一二歩である。この屋敷地と天白祠との関係は不明である。

(14) 直江広治「屋敷神の研究」第四篇第五節「屋敷神と荒神信仰」参照

(15) 本家の当主依田泰八氏が昭和一五年頃に、三宝荒神を堀内に移転することを考えたが、母堂が反対した事実がある。これは堀内を屋敷地と考えることに問題があることを示している。そして近世の検地の屋敷が本来の屋敷であったかは後考にまきたい。この問題については直江広治前掲書二五—一六三頁参照。

(16) 「甲斐志料集成」三卷二〇二頁

(17) 「依田家先祖書并長安御心得書」には、長安については「我等の事ハ不及申先祖代々歳記法事之義帯刀」即ち本家の茂矩が、「佐内事ハ前屋敷中かう元祖故」長英の子孫が法事を勤めることにしている。

(18) 「目下部町誌」一一三頁。なお下井尻村雲光寺には石造の墓碑の正面に「中興開基孝徳院実翁玄智居士」、右側面は上部に家紋の揚羽蝶があり、その下に「六孫王経基公五男、従五位上源下野守満快五代之後胤、依田六郎為実三拾

代孫当州山梨郡、下井尻村俗名依田民部源長安廟」、左側面は上部に、まんじに輪をし、その下に「延享五丙寅天二月十五日建焉、忌日」と刻んである。忌日の下と、裏面は何も刻んでない。

(19) 山梨郡八幡村北（現山梨市八幡）の秀森山清水寺の本堂には、依田家御先祖と称する木製等身大の座像がある。図では撮影のため野外に出した。また本堂の窓枠は依田家の隠居所のものだと言われている。



依田御先祖像

「依田民部一代記」の浄秀庵の項に「合新甲金五両手前自縁代并置所諸入用」とあり、庵が引移り観音堂を清白寺境内に片付けた際に、若し観音堂が再建立された場合には、「我等自縁右之所ニ差置前ニ戸を立不見様ニ其前ニ我等開基之拝面斗立可申候」とある。この依田長安像に当るのではないかと考えるが、推測の域を出ない。

(20) 「山梨県史料」9「二五九、二八七、三一、三五六、三七二—三、四〇三、四六三、五六四、六五三、六七三、六

七七、七三三、七三八、七四〇、七四一、七七一、
七八三、七八四、八五一頁

(21) 文部省史料館蔵

(22) 「甲斐志料集成」五卷三一、三一六、三七八頁

(23) 「中巨摩郡志」第十編神社誌五八、七一頁

(24) 「定本柳田国男集」一二卷五四、六三、一五四頁。なお
柳田国男「地名の研究」九二頁(角川文庫)でも天白につ
いてふれているが、その内容は「石神間答」と似たもので
ある。

(25) 「大天白神考」日本民俗学二卷一号、「天白新考」(堀田
吉雄「山の神信仰の研究」所収)

(26) 大日本地誌大系本、下巻一三三頁

(27) 堀田吉雄「山の神信仰の研究」三三〇―四、三四九頁に
天白社の一覧表がある。以下この表による引用は註記を省
略する。

(28) 直江広治「屋敷神の研究」二五―六、二八頁

(29) 「広文庫」一三冊七八四頁

(30) 大正二・三年名古屋史談会編輯本、第二一六二頁、第三
一七八頁、第四一三八頁、第六一五七頁

(31) 「名古屋叢書統篇」四卷四〇八、四二八頁、五卷四三三
頁、六卷二七三、四〇五頁、八卷二七頁

(32) 明治二五年愛知博文社發行本、六集一七丁、八集五八、
六三丁、十集三三丁、十二集四四、四五丁、十六集四七、

四八丁

(33) 名古屋史談会編輯本第四一三八頁

(34) 文部省史料館蔵写本

(35) 明治三三年岡部讓校訂本、一九一、一九九、二〇〇、二
〇六、二八二―四、三〇九頁

(36) 磐田郡池田村天白神社には永禄四年「今川氏真カ判物
写」がある(「静岡県史料」五輯二五九―六〇頁)。

(37) 昭和七年足立鉄太郎校訂本、上巻二〇八、二二五、二八
四、三〇九、三一五、三六〇、四四〇、四四二、四四九、
五八四、五九四頁、下巻八一、一二七、二五一頁

(38) 昭和五年橋本博綱本、一編八八、一三四、一三九、一八
六丁、二編六、一九、二二、二八―九、三八、一六五、一
七〇丁、三編一四五丁、四編二九、五四、二〇三丁、五編
九二丁

(39) 足立鉄太郎訂本、一輯五四、七五―八四丁、三輯六、
八、三七―八丁、四輯一―二、一四、二〇、五五丁、八
輯二八、五六、六五―六丁

(40) 足立鉄太郎訂本、一輯九五丁、二輯三五丁

(41) 戸羽山瀚修訂編纂「増訂豆州志稿伊豆七島全」三二三、
三五八、三八九―九一頁

(42) 大日本地誌大系本、一卷二四頁、二卷三四六頁

(43) 大日本地誌大系本、六卷三三七頁、八卷四〇頁、十卷二
〇―一頁、十一卷一五、二七、一〇二、一五八、一八〇

一、一九八、二〇六、二四三頁。なお堀田氏はこの他に足立郡間宮村大白天社（七卷三〇四頁）を記している。後考にまわしたい。

なお三島政行等編「御府内備考」（大日本地誌大系本）には見当たらない。

(44) 「信濃史料叢書」二卷三四一、三五四、三五七―九、三六六―八、三七―一四頁

(45) 堀一郎「民間信仰」一〇二頁

(46) 長野県蔵板、一卷北信篇、二卷東信篇、三卷南信篇である。頁数は通巻頁による。三四、一三一、一三五、二四

四、二四五、二四九、二五〇、二六〇、二四六、一二五

二、一三六六、一九四八、二〇六三、二〇九五、二二七

二、二三七七、二八二五、二九四一、二九四八、三二二

九、三三六八、三三〇六、三三一五、三三二一、三三四

五、三三五〇、三四〇七、三四〇八、三四四六、三四五

四、三四五五、三四六七、三四七三、三四八八、三四九

二、三五二三、三五六七、三五七一、三六九四頁

(47) 「上田藩村明細帳」（大日本近世史料）上巻七三、一二四

頁。下巻三八二頁。

(48) 中村たかを「遠山祭について」（石田英一郎教授還暦記

念論文集）所収

(49) 水野都津生「天白さまという神様」伊那一九卷一号一二

一三、一七頁

天白祠と甲州依田家（藤村）

(50) 「伊那」一九卷二号四七頁

(51) 向山雅重「口絵さんより　こより」、篠田徳登「古墳発

掘」（共に伊那一九卷一号）は上伊那の天白についてであるが、「長野県町村誌」、堀田氏の研究を重複していることを

附記する。

(52) 大正元年堀川古楓堂発行「白河風土記」下巻四五―六頁

(53) 「宮城県史」二三卷一六一頁、二五卷二〇四、二〇八

頁、二八卷六九〇頁

(54) 伊賀国の「三国地誌」、大和国の明治一七年斎藤華澄編

「大和志料」、享保二二年関祖衡纂「日本輿地通志畿内部分大

和国」、近江国の天保一五年武部勝重撰・寒川辰清編輯「近

江国輿地志略」、美濃国の文久三年伊東東臣「百茎根」、飛

騨国の「飛州志」、明治六年宮田礼彦「斐太後風土記」、下

野国の河野守弘編「下野国志」、常陸国の中山信名平四修

・栗田寛叔栗補「新編常陸国志」、陸奥国の文化六年源容衆

序「新編会津風土記」などには天白祠は見当たらない。

(55) 「宮城県史」二五卷二〇四頁

(56) 「駿河志料」一編一三九丁

(57) 「同右」二編二八―九丁

(58) 「修訂駿河国新風土記」八輯二八丁

(59) 「天白さまという神様」伊那一九卷一号一七頁

(60) 下井尻村井尻家の屋敷神は東照宮である。屋敷の北に小

高い岡があり、林になっている。岡の中央に石段があり、

登った所に神殿型の木製小祠が鎮座しており、傍に御神木がある。石段は天白祠と同質の石材を使用し、階段数は多いが似た型式である。この屋敷神について、井尻家文書の「由緒書上苗字帯刀御免願一件記録帳」の享和二年の項には、寛政一一年春思立として、「東照宮様我等居屋敷北江奉歓請置候ニ付、毎日参詣奉拜、我等一生之間、毎月十七日ニ魚鳥を相慎、我等在命迄常夜灯明奉献、永代毎年二月十七日歟、十一月十七日歟、苗字帯刀御免蒙被仰渡候月歟、目出度月を撰、十七日を御祭礼定日ニ仕置、前日御日待を以、懇意之衆中を相招、神酒を振舞、下男下女を為遊、御祭礼相勤可申候事」とある。

つぎに神殿を明治三五年に普請しているが、松皮師の代金覚には「家敷神社」とある。

(補) 「国書総目録」五卷八五七頁には謡曲「天白」がある事を記している。残念ながらまだみていない。なお水野都津生「天白様という神様補遺」伊那一九卷四号には三三社を紹介しているが、すべて前出のものと同様している。

後記 本稿の作製に当っては、直江広治氏から御指導を、中村たかを氏と旧制高知高等学校での井上増次郎先生からは御教示を得た。依田泰八、依田道彦、依田善子、鈴木寿、河内八郎の諸氏には、調査に当って便宜を賜った。文部省史料館、慶応義塾図書館には所蔵史料、図書の閲覧利用を許可された。記して感謝したい。

